

## 受難節第一礼拝

2023年2月26日（日）

題 「切に祈るイエス」

テキスト：ルカによる福音書22章39～53節

皆さん、おはようございます。

先週日曜日の礼拝後には、今年度2回目の教会総会を開催しました。次年度に向けての準備をできましたことを感謝いたします。役員の方々を始め祈ってくださった教会員の皆様に感謝いたします。新しい役員の方々も決まり感謝しています。退任される役員の方々のご奉仕に篤く感謝し働きの労苦に神さまの慰めをお祈りいたします。

さて過ぐる22日（水）は灰の水曜日と言われ、受難節・レントに入りました。今年はイースターは4月9日（日）ですが、イエスさまの十字架に至る苦しみの歩みと、神さまの憐みを思う期間です。イースターのご案内をお読みください。また一緒にイースターの喜びを待ち望み、迎えたいと願います。

今日の聖書の個所は、主イエスがオリーブ山で祈られる場面と、弟子のユダに裏切られる出来事が記されています。

一緒に学びつつ、神さまのことばを願い求めつつ聞きましょう。

### ◆オリーブ山で祈る

39:イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。

40:いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。

このオリーブ山とは、エルサレムの街の東側にある小高い山です。ゲッセマネの園と言われます。そのオリーブ山にある園がゲッセマネ園と言われ、ゲッセマネは「オリーブの油しぼり」という意味です。

園にある多くのオリーブの木の中には樹齢2000年という大きな幹のオリーブの木もあります。まさにイエスさまが地上を生きておられた時に生えていた木です。ここを読むと、イエスさまはエルサレムに来た時にはいつも夜中にこのオリーブの園で祈っておられたようです。39節にも、40節にも、「いつものようにオリーブ山に行かれると、」とあり、「いつもの場所に来ると、」とあります。わたしたちも、できれば一日の中で自分で決めた祈りの時と場所を持つことも大切なのだと思わされました。

ちなみに現在ではゲッセマネの園の近くの教会内には、イエスが膝まずいて祈られたと言われる大きな石が置かれています。祈られた主イエスを覚えて偲ぶためであろうと思われます。イエスは朝な夕な、神によく祈りを捧げられました。霊なる愛なる神と、ことばを交わし、あたかも呼吸を交わすかのように、祈りは、神と人をつなぐ水路のようなものとして、主イエスの生活に溶け込んでいたのです。そして祈ることから人々の中へと入って行かれたのです。この場面では弟子たちは、イエスに従ったようです。この時の弟子は12人ではなく11人でした。イエスを裏切ったユダはこの場所にいなかったのです。12という数字は聖書では完全数です。イスラエル民族の部族は12部族です。11人の弟子これは破れてしまった弟子の姿を、ひいてはイスラエルの民の姿、人間の姿をも表しているかのようです。イエスは弟子たちに、オリーブの園で、暗闇の中、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と勧められました。

そしてイエス自身は、

「41:そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいて

こう祈られた。」とあります。イエスは弟子たちを離れ、神に身を投げ出して祈られるのです。ここには、襲ってくる最後の苦難の中で身と心を注いで、神の前に投げ出して、委ねてひたすら祈る、神の子イエスの姿があります。強いイエスの姿ではなく、神の前で弱さをさらけ出したイエスの姿のように思えるのです。

42:「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」と。

ここは、同じことが記されているマルコによる福音書によれば、ルカのことばよりも端的に、「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。」となっています。「アッバ」は、イエスさまが日常で使っておられたアラム語で、小さな子どもが父親に対する親しい呼び名で「お父ちゃん!」「お父さん」ということです。

イエスさまは、苦しい中で切に神さまを呼ばれたのです。「この杯を」とあります。杯は喜びの時を表しますが、ここでは、これからイエスが受ける、十字架苦しみの時のことだと思えます。わたしたちでも、本当に苦しみの状況に落ちた時に、「この杯をわたしから取りのけてください。」と祈ることがあるのではないのでしょうか。わたしもかつてそう祈ったこともありますし、きっと皆さんの中にもおありだと思えます。

しかし、イエスさまは、「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行って

ください。」とも祈られたとも記されています。次の〔〕内のことば、〔43:すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。44:イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕は、この言葉を書いてない写本（聖書としてまとまる前の元の原本）もあるとの意味ですが、わたしは、今回「天使が天から現れて、イエスを力づけた。」ということばは、神さまご自身が苦しむイエスのそばにおられたのだと受け止めました。

〔44:イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕。ここはイエスの苦悩の深さを表しているのだと思うのです。

しかし、イエスが祈りから弟子たちのところに、戻ってくると、

「彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。」(45) のです。弟子たちは、イエスに起こる十字架の死のことを理解できず、イエスの姿がただ事ではないことを感じ、たただ悲しみの中、寝込んでいたのです。わたしたちも、生きています。悲しみの中、眠れぬ夜もあれば、悲しみ果てに気力も萎え果てることもあります。しかし、そのような弟子たちと共に愛なる神さまはいてくださったのです。そして時を超えて今も悲しむ者と共にいてくださるのです。

愛と悲しみは神さまを知ることのできる最善の揺り籠のようにも思えます。

悲しむことは決して無駄なことではなく、悲しみの中で神を見上げることこそが大切なのではないのでしょうか。

ここで、イエスはただ一言、弟子たちに言われました。

46:イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」と。イエスが教えてくださった、主の祈りのことばを思います。

「わたしたちを誘惑におちいらせず、かえって、悪からお救いください。」と。

ここからは、いよいよイエスが逮捕される場面になります。イエスは、夜の暗闇の中、ゲッセマネのオリーブの茂る園でユダヤ当局に逮捕されたのです。

そこには、イエスの愛した弟子のユダの裏切りがありました。

47:イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。

「十二人の一人でユダ」という言葉に何とも言えない胸騒ぎを感じます。

どうして弟子のユダはイエスを裏切って、ユダヤ当局者に明け渡したのでしょうか？これは謎で、後でイエスが言われたように闇が力を振るっている時としか、言いようがないかのようです。ユダは親しい間柄で行われる当時の習慣である接吻をもってイエスを裏切ったのです。人間の力を超えた闇の力に支配されるというはこう言うことでしょうか。讚美歌 493 番 3 節に「世の友われらを捨てるときも」とあります。この詞を書いた人の心境を思います。人生にお

いて大変な苦悩を受けた人のようです。

48:イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。

49:イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。

「50:そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。」この切りつけた人物は弟子のペトロとも言われています。イエスは、「やめなさい。もうそれでよい」とストップをかけられました。そして、その耳に触れて癒されました。ここでもイエスは傷つけられた者に対して、癒しのわざを行われました。神に切に祈ってご自分の身をサタンの策略に任せたのです。

そしてイエスは、自分を逮捕するために来た人々に向かって、落ち着いて、毅然として、はっきりとした声で、

52:それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。

53:わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振っている。」

**闇の支配する暗闇の中で、イエスの言葉は響いています。**

このことは、人間を襲う暗闇はとてつもなく、深く、大きくかつ強大な力を持っているが、なおそのような中にも、イエスと共なる愛なる神の働きはあるのだと、続いて行くのだということを示しているのだと思います。もちろん悪は悪で、認めることはできません。ただ神の子イエスの十字架への道なしに全人類の罪の赦し、罪からの解放と自由は実現しなかったのです。

わたしたちも、時に、どうしてこんなことが起こるのかと思うこともありますが、神さまはすべてをご存知で、神は信じる者たちと共に万事を益としてくださるということを信じて、共に助け合って一日一日を生きて行きたいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。